



TITLE:

大学教育評価：評価する側の論理 (<第11回大学教育研究フォーラム >挨拶)

AUTHOR(S):

尾池, 和夫

CITATION:

尾池, 和夫. 大学教育評価：評価する側の論理(<第11回大学教育研究フォーラム>挨拶). 京都大学高等教育研究 2005, 11: 84-84

ISSUE DATE:

2005-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54168>

RIGHT:

挨拶

尾 池 和 夫（京都大学総長）

（尾池） 京都大学高等教育研究開発推進センターが実施しております大学教育研究フォーラムの第11回にたくさんの方に参加していただき、ありがとうございます。この大会企画フォーラムの開催にあたり、ご挨拶申し上げます。

センター長の丸山正樹さんの、発表者・企画者募集のご案内にありますように、この大学教育研究フォーラムが、大学における教育研究の交流の場として、これからの大学教育全体の知的資産を共有するために、ご参加の皆さまが有意義な議論をしていただける場となることを、私も願っております。

このフォーラムのために、はるばるお越しいただき基調講演をしていただく、大学評価・学位授与機構長の木村孟（きむらつとむ）先生はじめ、話題提供していただく先生方に、心から感謝いたします。

先日、私は朝日新聞社のシンポジウムで慶應義塾長の安西先生たちと討論しましたが、そこでもこれからは、日本の大学は国公立大学の連帯によって、国際競争力を持つことが何より大切という意見の一致が見られました。そのためにも、このフォーラムのような機会を通して大学教育研究の議論が重要な役割を果たしていくことと期待されます。

とくに、木村先生のご講演下さる大学の評価という課題は重要です。評価ということが盛んに言われるようになって久しいのですが、本当に意味のある評価が行われるかどうかは、日本の大学の国際競争力を高めていく方向を左右する重要な問題であります。それを考えるために、試行的評価による蓄積、諸外国の調査などを通しての、貴重な知見が伺えると思います。

日本の大学が国際競争力を持ち、日本の地域社会の文化を支える力を持つためには、評価が威力を発揮して、評価されるものの進展につながる事が大切であり、評価というものは、評価されるものと評価するものとの信頼関係がまず基本になければなりません。そのためにも、この基調講演から得るものが多いと思います。

同じく木村先生が副会長を努めておられる中央教育審議会は、「我が国の高等教育の将来像（中間報告）」を出しました。これは、21世紀を「知識基盤社会」（knowledge-based society）の時代であるとして、国公立大学の将来像を論じるものです。そこでは、高等教育の質の保証を中心のテーマとして、それぞれの大学が不断に努力するとともに、質の保証を支える仕組みを整えて効果的に運用することが国としての基本的な責務であるとされています。

その高等教育の質の保証の仕組みとしての評価があり、事前事後の評価、自己点検・評価の結果に対する市民の理解の重要性があげられています。高等教育には、社会の期待があり、それに応える力を持つことが私たちの役目です。国立大学の法人化の影響も大きく、新しい制度のマイナス面があれば、躊躇せずすぐさま修正していく必要があります。高等教育はこれからも変容を続けていくこととなるでしょう。

京都大学の最近の教育改革は、法人化する前から進められています。本学では、平成12年度の京都大学自己点検・評価報告書Ⅱの刊行に引き続き、平成13年度には「教育・研究と社会」と「国際交流」の2つに焦点を絞って、自己点検・評価を実施しました。そのときには、卒業生、関係企業、留学生、外国人研究者、協定校など、外部の意見を聴くため、本学としてこれまで例のない大規模なアンケート調査を行いました。その結果からは、国際化の中で、京都大学が創立以来大切にしてきた「自由の学風」の理念があらためて浮かび上がると同時に、その理念の持続のための改革の必要性も浮かび上がるものでした。

評価を受けるものの立場からのご報告とともに、それらをもとにした議論の展開から、大学の未来が見えてくるとと、このフォーラムの成果を期待しつつ、ご参加のみなさまに感謝し、開会にあたっての私の挨拶といたします。

ありがとうございました。